

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

1 遺跡の立地と周辺地形（第5図）

大山北麓には広大な火山麓扇状地が展開しており、赤坂小丸山遺跡はその一角に位置している。この火山麓扇状地は開析谷によって分岐を繰り返しながら、緩やかに標高を下げつつ北に延びる台地状のなだらかな丘陵群によって構成されている。こうした丘陵群の大半は地形区分では台地に分類されており、遺跡が位置する丘陵群は「報国台地」と命名されている（鳥取県 1974）。

報国台地と西に隣接する退休寺台地は2本の中規模河川によって挟まれている。西が下市川で、東が甲川で、両河川とも丘陵北端を過ぎてほどなく日本海に注いでいる。これらの河川とその支流によって丘陵の開析が進んでおり、遺跡周辺は支丘陵と谷が細かく入り組んだ複雑な地形をなしている。

遺跡周辺は大きくみると3つの丘陵が北に延びており、それぞれの丘陵間には水量の少ない谷川が蛇行しながら北流している。西の支丘陵に下甲退休原第1遺跡が、東の支丘陵に赤坂頭無し遺跡が立地し、中央の最も日本海へと突出する支丘陵上に赤坂小丸山遺跡は位置している。

調査地の地形は丘陵部と谷部分からなり、比高差は最大で13m程ある。調査地中央に横たわる丘陵頂部は幅200m程の幅広い平坦部を形成しており、この丘陵平坦部から東西両側へは比較的緩やかな斜面が続いている。西斜面は標高66.0m付近の肩部までは比較的緩やかに下っていくが、肩部以下は急傾斜となって谷底へと至り谷川に達している。

東斜面は西斜面よりさらに緩やかな斜面が続き、丘陵肩部は明瞭ではない。細かくみると、北側のC区側へは標高を減じながら徐々に地形が張り出すのに対して、南側のF、G区側は一定の傾斜で緩やかに下っていき、そのままB区との間にある谷底へと至っている。この浅い谷を隔てた東側にA、B区が位置する支丘陵が南から張り出してきており、丘陵は調査地内でほぼ収束している。古代末から中世初頭の製鉄炉や粘土採掘坑はこの丘陵先端部の西寄り斜面に位置している。さらにその東側は赤坂頭無し遺跡が位置する丘陵とを隔てるやや深い谷が形成されており、谷底には小規模ながら谷川が通水している。

調査前は大部分が畑として利用され、A・B区は山林であった。そのため、丘陵平坦部の東区C・D・E・G区は果樹栽培や畑等の耕作により大きく削平を受けており、B区は植林による根攪乱や流土堆積が著しい。

2 基本層序（第6～8図）

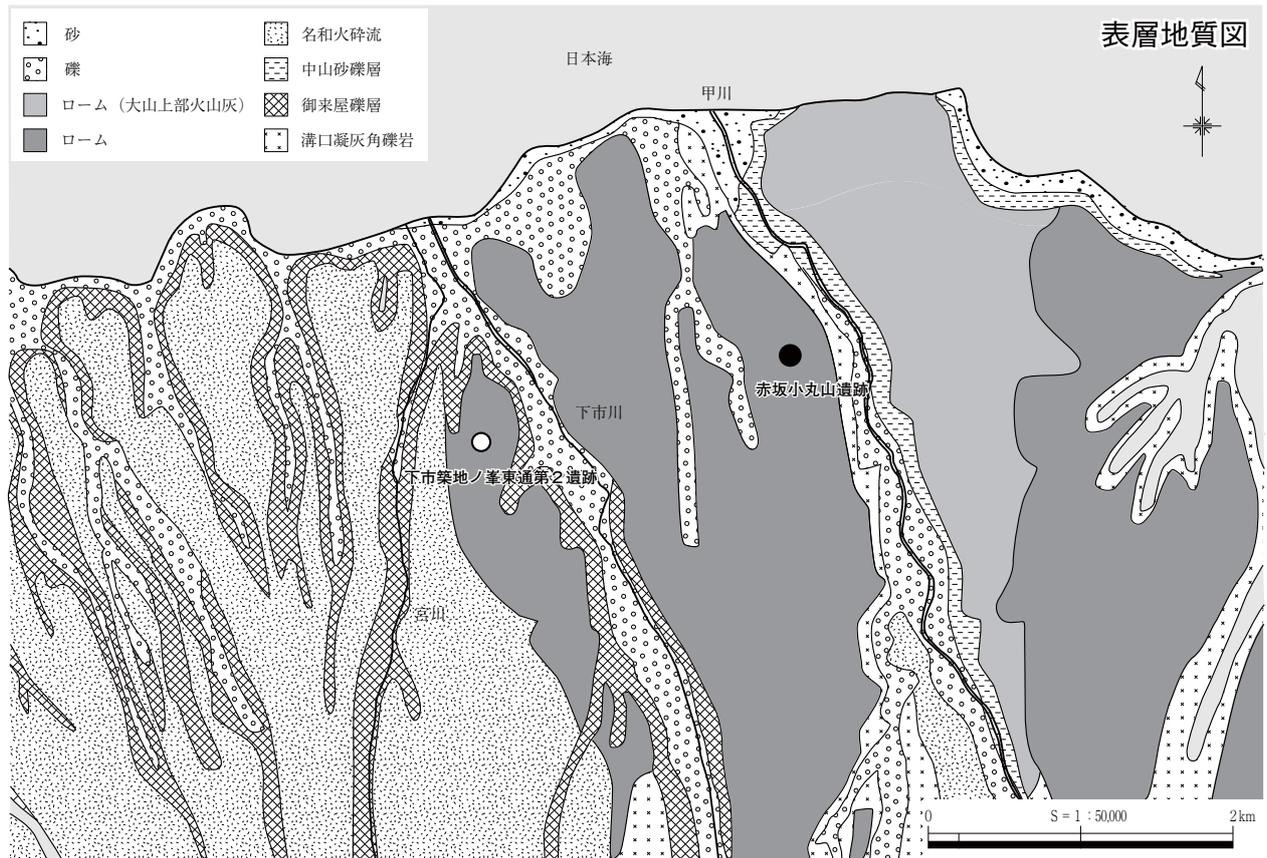
調査地内は基本的に火山碎屑物を主体とする堆積層を基盤層とし、その基盤層の上をクロボクが全体に覆っている。調査地内の基本層序すべてに通し番号の層名を付し、以下に各層の特徴を示す。なお、VII、XVII層については第133図の中で図示している（第3章第4節）。

I層：表土・耕作土。

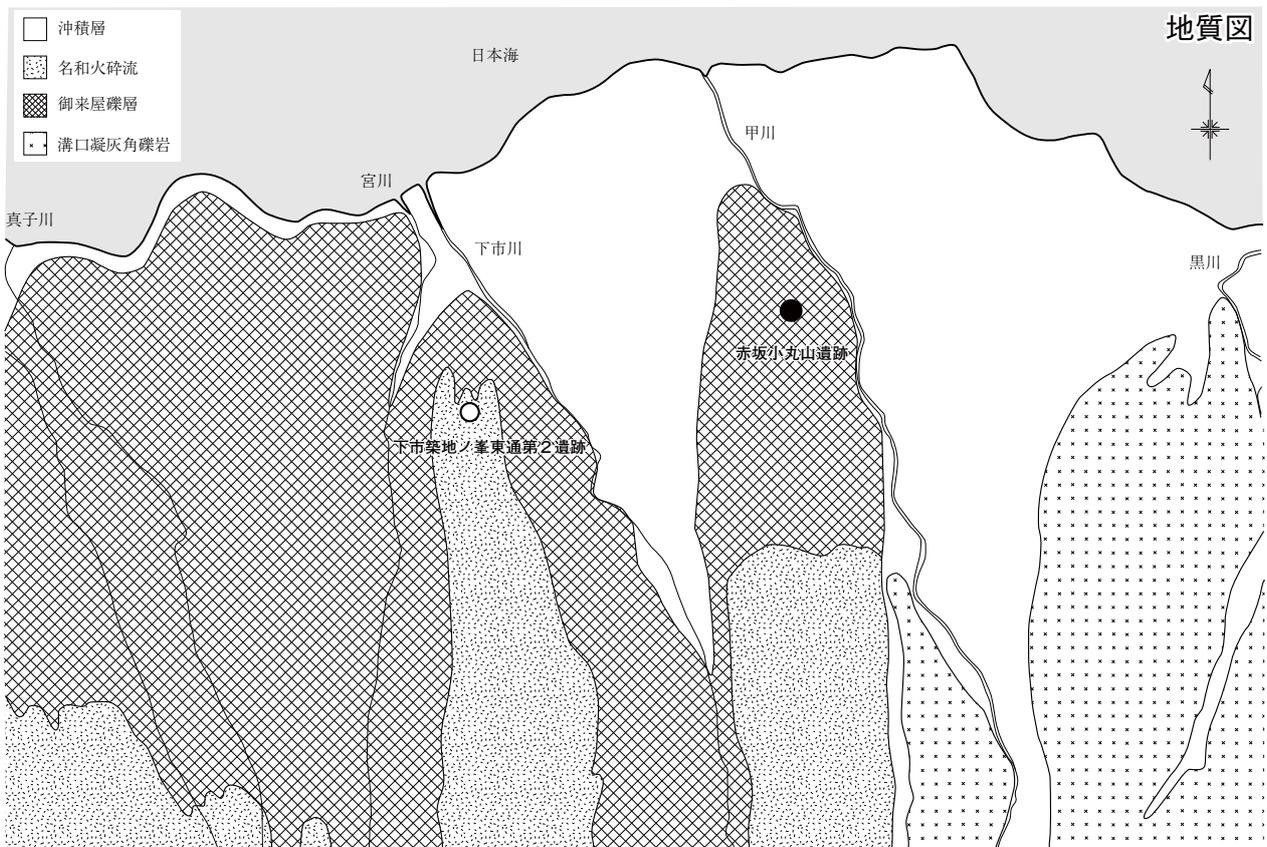
II層：暗褐色土（10YR3/3）。出土遺物は無いが、中世以降の堆積層と考えられる。東区B区のみで確認され、2層に細分される。

III層：黒褐色土（10YR2/2・10YR2/3）。古代から中世にかけての遺物包含層と考えられる。B区の

第3章 調査の成果



鳥取県1974「表層地質図」「大上山麓開発地域土地分類基本調査 赤碕・大山」を基に作成

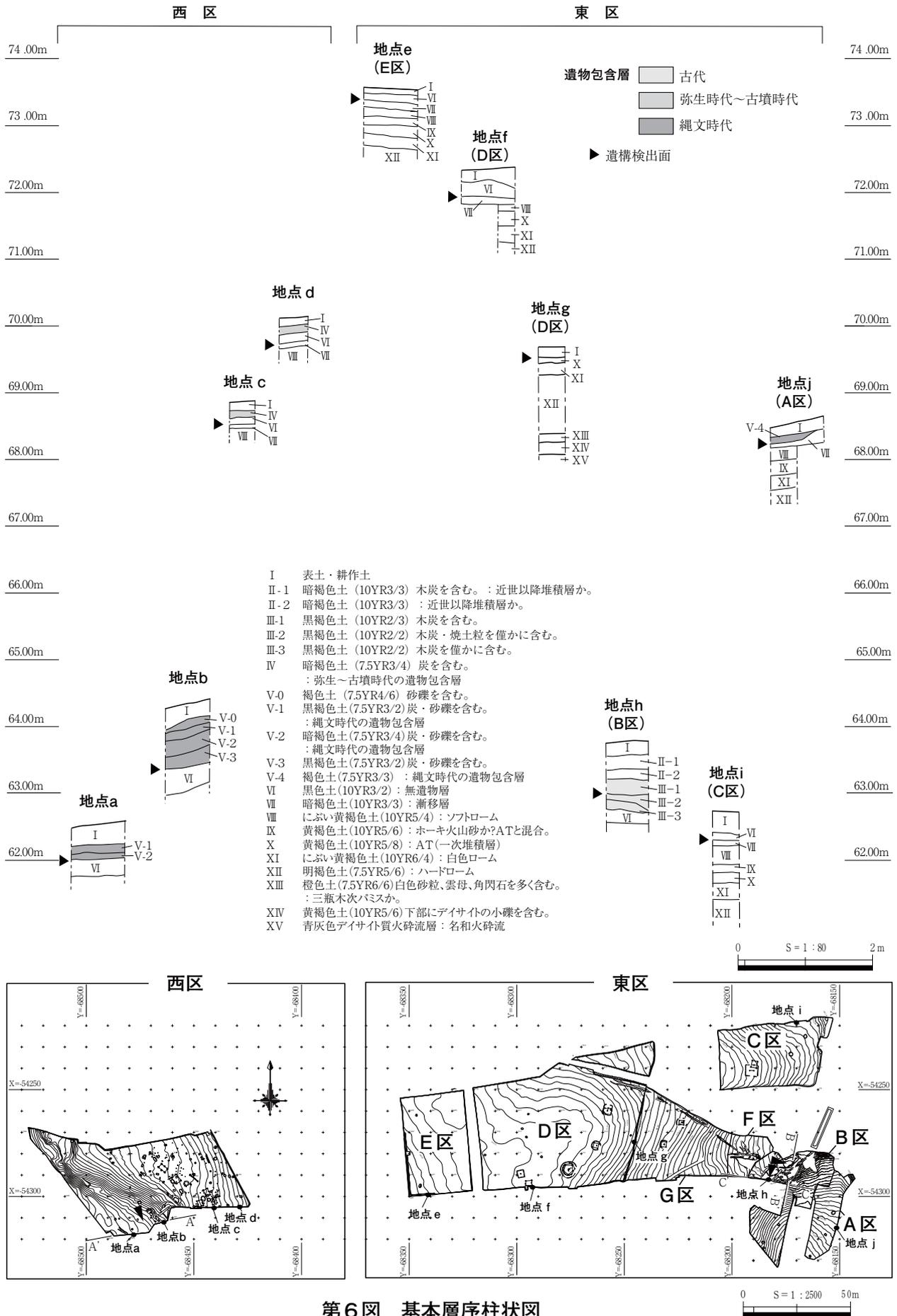


工業技術院地質調査所1962「5万分の1地質図幅 赤碕・大山」を基に作成

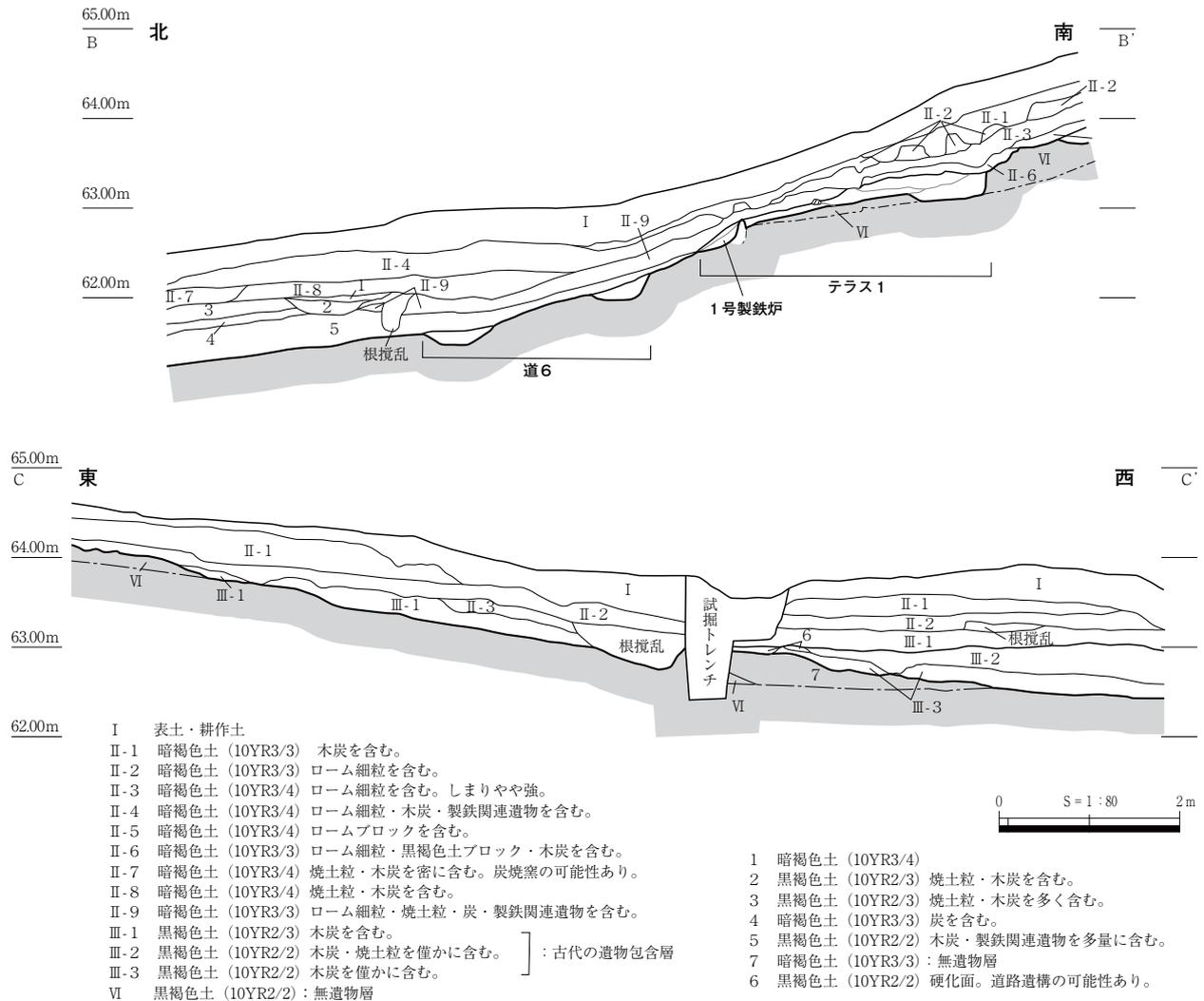
第5図 遺跡周辺の地質

【参考文献】

鳥取県1974『大上山麓開発地域土地分類基本調査 赤碕・大山』
 中山町誌編集委員会2009「第一編 自然」『新修中山町誌』大山町



第3章 調査の成果



第7図 東区B区土層断面図

斜面裾から谷底にかけて堆積し、3層に細分される。III-2層上面がテラス1や排滓場1等の古代以降の遺構検出面となる。

IV層：暗褐色土 (7.5YR3/4) ～褐色土 (7.5YR4/6)。弥生時代から古墳時代の遺物包含層である。西区のみに堆積する。

V層：黒褐色土 (7.5YR3/2) ～褐色土 (7.5YR4/6)。縄文時代の遺物包含層である。5層に細分され、V-0～V-3層は西区の谷部に堆積し、V-0層が縄文時代晩期、V-1、2層が縄文時代中期から晩期と考えられる。V-3層は縄文時代中期の可能性がある。V-4層は東区A区の丘陵上に堆積し、縄文時代早期の可能性がある。

VI層：黒褐色土 (10YR3/2)。クロボク、またはクロボク由来の堆積層。丘陵平坦部では表層の土壌化が著しい。無遺物層である。

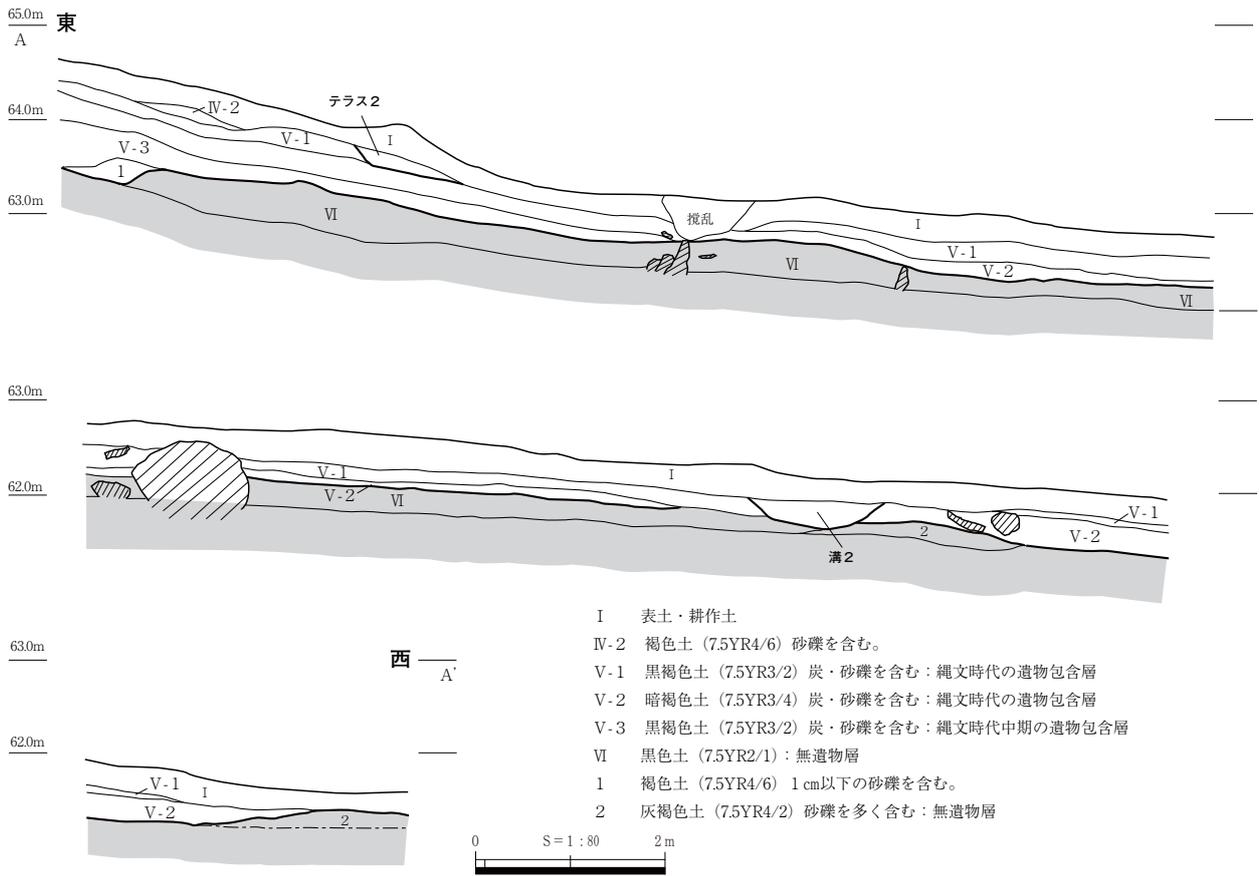
VII層：暗褐色土 (10YR3/3)。VI層とVIII層の漸移層。

VIII層：にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。いわゆるソフトローム層。

IX層：黄褐色土 (10YR5/6)。ホーキ火山砂の可能性ある。AT土と混ざる。

X層：黄褐色土 (10YR5/8)。始良丹沢火山灰 (AT) 層。

XI層：にぶい黄褐色土 (10YR6/4)。いわゆる白色ローム。



第8図 西区谷部土層断面図

XII層：明褐色土 (7.5YR5/6)。いわゆるハードローム。

XIII層：橙色土 (7.5YR6/6)。白色砂粒、雲母、角閃石を多く含む。三瓶木次パミスの可能性がある。

XIV層：黄色褐色土 (10YR5/6)。下部にデイサイトの小礫を含む。

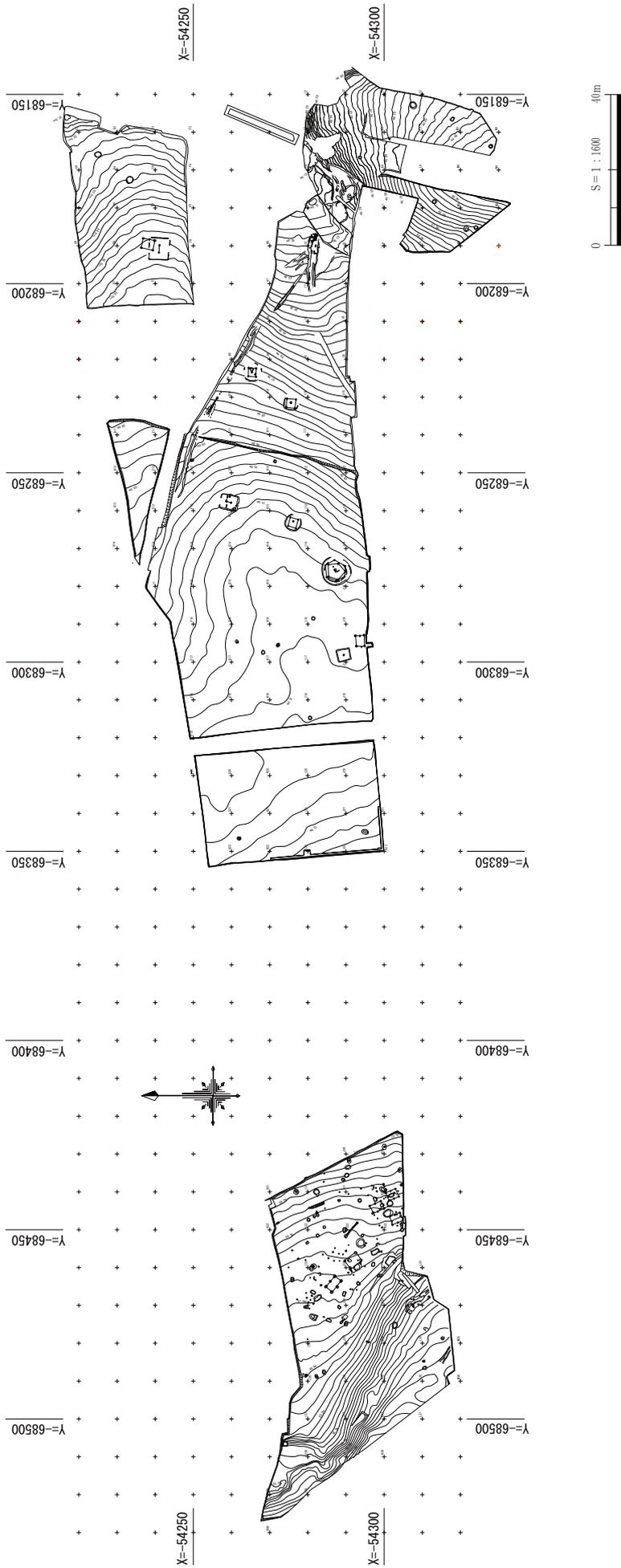
XV層：青灰色土 (5B6/1)。デイサイト質の石質火砕流層で、名和火砕流層とみられる。

XVI層：浅黄橙色土 (10YR8/3)。XVII層が風化し粘土化した堆積層。B区のみで確認され、粘土採掘坑1により採取され、製鉄炉の炉体に用いられる。

XVII層：浅黄橙色角礫岩層 (10YR8/3)。クサレ礫からなり、風化土壌を含む。古期大山の火山細屑物である溝口凝灰角礫岩ではなく、さらに基盤にある花崗岩類や第三紀層に由来する堆積層とみられる (第3章第4節)。B区のみで確認され、粘土採掘坑1により採掘され、XVI層と同様に製鉄炉の炉体に用いられたと考えられる。

3 調査成果の概要 (第9～11図)

赤坂小丸山遺跡では、縄文時代から中世にいたる幅広い時期の遺構や遺物を確認している。各時代における遺構の詳細は次節以降に委ねるが、縄文時代中期を中心とする集石土坑や多量の土器、黒曜石製石器が出土した縄文時代と製鉄炉やそれに付随する粘土採掘坑が確認された古代末から中世初頭に特色をもつ。一方で弥生時代後期や古墳時代中期にも小規模ながら集落が形成されており、とりわけ、古墳時代の集落はその後の後期に至り拠点的な集落が営まれた赤坂頭無し遺跡との関連性が注目される。遺跡全体としての遺構密度はそれほど高くはない。とくに東区西半を中心とする丘陵平坦部の広範囲は希薄であり、丘陵縁辺部にかけて遺構が集中する傾向にある。



第9図 赤坂小丸山遺跡遺構配置図



第10図 赤坂小丸山遺跡西区遺構配置図